

巻 頭 言

本研究所令和元年度の紀要『言語と文化』第32号をお届けします。

本号には研究論文4篇、研究ノート3篇、報告1篇を掲載しています。まずは、投稿して下さった方々、そしてご多忙の中貴重な時間をさいて査読に協力して下さった方々には心より厚く御礼を申し上げます。

2019年は、日本の元号が「平成」から「令和」に変わった記念すべき年で、「元号」は文化的ブームとして大きく注目を浴び、議論の対象となりました。「令和」の典拠は、公式発表では、日本最古の歌集『万葉集』巻五の「梅花の歌三十二首」の序文とされています。一方で、二世紀頃後漢の張衡『帰田賦』に「令和」がすでに見られていることや「梅花の歌三十二首」の序文そのものに四世紀頃のかの名高い「蘭亭序」の影響が見られると指摘する声も聞こえ、話題となりました。このような活発な議論はまさに、東アジアの言語交流と文化交流の濃密さを物語るもので、言語と文化の歴史への関心をかつてないほどまでに高めてくれました。名称に「言語」と「文化」を含む本研究所としてはこれを喜び、こうした関心が長く続くことを願っています。

本号も多くの投稿があり、誠に喜ばしいことではありますが、厳正な審査の結果、掲載にいたらなかったものが複数出てしまいました。博士学位を授与する大学院の附属研究所として査読制度を取り入れている以上、学術雑誌としての水準を維持するためには、やむを得ないことです。令和の新しい時代においても学術雑誌として、さらに多くの研究成果を送り出たく、多くのご投稿を期待しております。

ところで2020年1月頃より新型コロナウイルスが世界各地で猛威を振るうようになり、さまざまな方面に影響をもたらしています。学会の開催中止や研究出張の取り止め、海外教育研究機関との交流活動の延期などが相次ぎ、本研究所の活動にも暗い影を落としています。一日も早い沈静化を願いつつ巻頭の言とします。

令和2年3月

言語文化研究所
所長 蔭 垂 東

